

新型コロナウイルス感染症に伴う臨時休校措置と中学生の意識

Awareness of Junior High School Students and Temporary School Closures Due to COVID-19

渡 部 千 晶*
WATANABE Chiaki

戸 部 秀 之**
TOBE Hideyuki

【概要】本研究では、新型コロナウイルス感染症により約3か月間の臨時休校措置がとられた中で、感染症やその予防行動に対して中学生がどのような意識をもっており、また臨時休校や学校再開にどのような不安を抱えているのかを明らかにすることを目的として調査を行った。臨時休校が始まった直後の3月と、緊急事態宣言により休校延長が決まった後の5月の2回にわたって調査を実施し、その間の生徒の心の変化に注目しながら検討した。

【キーワード】中学生 新型コロナウイルス感染症 臨時休校 意識 不安

1. はじめに

2019年12月初旬、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の第1例目の感染者が中国湖北省武漢市で報告された。この報告の後、感染は中国国内に留まらず瞬く間に世界中に拡がり、2020年3月にはWHOが「パンデミック（世界的大流行）」に至っているとの認識を示すまでになった。日本も例外ではなく、2020年1月中旬に中国武漢市に渡航した男性から初めて感染が確認されて以来、都市部を中心に徐々に感染者が増加し、2月25日には政府の「新型コロナウイルス感染症対策本部」が基本方針を決定した。さらに2月27日、同対策本部において当時の安倍内閣総理大臣が3月2日から春季休業の開始日までの間、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校における全国一斉の臨時休業を要請する方針を示した。突如として始まった臨時休校措置により、学校現場は大きな混乱をきたした。卒業式を含め、3月に予定されていた学校行事は中止や短縮を余儀なくされ、例年とは全く異なる学年末となった。それでも春休み明けの学校再開を目指して準備を進めていた矢先の4月7日、安倍総理が東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県を対象に緊急事態宣言を行い、その後4月16日に対象を全国に広げた。教育現場はこの緊急事態宣言を受け、さらなる休校の延長に直面することになる。結果として3月から5月末までの3か月間、ほとんどの公立小中高等学校において児童生徒は通常登校できない状況になった。感染拡大に伴う外出自粛要請もあり、子どもたちの行動は制限され、多くの時間を自宅で過ごさざるを得なくなった。

この前例のない一斉臨時休校の中で、子どもたちの抱えるストレスや、生活習慣の変化に伴う新たな健康課題が懸念される。戸部（2020）は2020年3月に全国の養護教諭1,401名を対象にアンケート調査を実施した。そ

の結果、臨時休校前に児童生徒への指導や、保護者への情報提供を十分に行えた学校は少数であり、感染防止対策や休校中の過ごし方の指導を「しっかりできた」と回答した小中学校は2割に満たなかった。また、小中学校の養護教諭の9割以上が臨時休校による活動の制限などにより児童生徒のストレスや精神状態に影響があるのではないかと懸念を示している。さらに、学校再開後に不登校が増加するのではないかと心配が多く挙がった。これらの懸念に対し、子どもたちの不安や感染予防策の実践について実態はどうだったのか検討した例は少ない。

そこで本研究は、新型コロナウイルス感染症により約3か月間の臨時休校措置がとられた中で、感染症やその予防行動に対して中学生がどのような意識をもっており、また臨時休校や学校再開にどのような不安を抱えているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 対象および方法

2-1 第1回調査

第1回調査は、令和2年3月16日から3月31日に実施した。本調査期間は、令和2年2月27日の内閣総理大臣からの一斉休校の要請により3月2日に臨時休校が始まってから、2週間から1カ月が経過した時期である。

都内K区立T中学校に在籍する生徒402名を対象とし、Webによる無記名自記式アンケート調査を実施した。T中学校は東京23区の東部に位置し、最寄駅から約1km離れた住宅街にある中規模校である。本調査は、同校の教育の一環として行われたものであり、調査の目的、意義、人権的配慮に関して教職員全員が合意の上で実施している。質問紙の作成および回答の受付はGoogle社が提供するアンケート作成ツール「Google

* 葛飾区立常盤中学校

** 埼玉大学教育学部

フォーム」を使用した。また、調査に際し、休校期間中の分散登校時に保護者通知を配布し、各家庭の理解と協力を求めた。

研究の目的を理解し、参加に同意が得られた回答は212名（1学年91名、2年生88名、3年生33名）だった。

2-2 第2回調査

第2回調査は、令和2年5月18日から5月31日に実施した。本調査期間は、4月7日に出された緊急事態宣言が延長され、臨時休校期間が5月末までと決定した直後の時期である。

本調査は、第1回調査と同様に都内K区立T中学校に在籍する生徒を対象にして行ったが、第1回調査時から年度が変わったため、4月に新たに入学した新1年生と、第1回調査時から進級した新2年生、新3年生を合わせた全校生徒451名を対象とし、Webによる無記名自記式アンケート調査を実施した。質問紙の作成および回答の受付は、第1回調査と同様にGoogle社が提供するアンケート作成ツール「Google フォーム」を使用した。

教職員及び保護者には文書にて調査の目的や意義、人権的配慮を説明し、理解と協力を求めた。研究の目的を理解し、参加に同意が得られた回答は310名（1年生121名、2年生101名、3年生88名）だった。

第1回と第2回の調査では対象者が異なるため、本研究ではどちらの調査にも共通している学年に絞り、新2年生、新3年生のみを対象として検討を行うことにする。

2-3 調査項目

質問紙調査の質問内容は次のとおりである。

- ①臨時休校中の基本的生活習慣に関する質問項目
- ②臨時休校中の外出の状況や家での過ごし方に関する質問項目
- ③感染予防行動とその自己効力感に関する質問項目
- ④臨時休校措置や学校再開に関する質問項目

本研究では、これらの調査項目のうち、③感染予防行動とその自己効力感に関する質問項目、④臨時休校措置や学校再開に関する質問項目について検討した。

3. 結果および考察

第1回調査時に1年生、2年生の生徒（第2回調査時に新2年生、新3年生）を対象に調査したところ、第1回調査で179名（男子84名、女子93名、無回答2名）、第2回調査で189名（男子93名、女子94名、無回答2名）、合計368名の回答を得た。

3-1 感染予防行動とその自己効力感

新型コロナウイルス感染症の感染を予防するためには、3密の回避、マスクの着用、石けんによる手洗い、手指消毒用アルコールによる消毒の励行などの手段がある。臨時休校中、これらの予防行動を生徒たちはどの

程度自主的にとっていたのだろうか。

予防行動の実態を把握する上で、その行動を左右している「意識」についても、健康行動理論に基づいて検討することにした。数々の健康行動理論の中でも、本研究ではI.M.RosenstockやM.H.Beckerらが考案した「健康信念モデル（ヘルス・ベリフモデル）」を特に参考にしている。（松本，2002）このモデルでは、人が行動変容するために必要な条件の1つとして、「健康についてこのままではまずい」という《危機感》を感じることが必要だとしている。さらに、この《危機感》を感じるには、①このままだと病気になる可能性が高いと感じること（罹患性）、②病気になる、その結果が重大であるということ（重大性）、この2つの条件が必要になるとしている。

本研究では、この罹患性と重大性に注目し、生徒が新型コロナウイルスに対してどの程度危機感を持ち、予防のための行動の原動力になっているかを検討した。

（1）新型コロナウイルス感染症への意識

まず、新型コロナウイルス感染症について、生徒がどの程度理解しているのかを調べた。第1回調査（3月）と第2回調査（5月）の結果を比較すると、新型コロナウイルス感染症について「症状や予防方法、国内の感染の状況を知っている」と回答した生徒は79.3%から84.1%になり、この感染症に対して高い割合で生徒が知識を得ている様子が見られた。逆に「感染状況は大体知っているが、どんな病気かよくわからない」と回答している生徒は10.1%から4.8%に減少していた。

（2）罹患に関する危機感

新型コロナウイルス感染症について、生徒は自分自身が罹患する可能性についてどのように考えているのかを調べた。その結果、自分自身が感染する可能性が「十分あると思う」と回答した生徒は第1回、第2回の調査で33.5%から40.2%となり微増していた。「全くないと思う」と回答した生徒は11.2%から5.3%に減少しており、自分も感染するかもしれないという罹患性の認識は多くの生徒が高く持っていることがわかった。

（3）重大性の認識

新型コロナウイルス感染症に罹患することについて、生徒がどの程度「重大である」と捉えているかを調べた。最も多かったのは「自分や家族の命にかかわる重大な病気だと思う」という回答で、3月時点ですでに52.0%と半数以上が回答したが、5月の調査時にはさらに増えて67.2%に上った。「感染してもあまり心配はいらないと思う」という回答は3月時点で7.8%だったが、5月には4.2%に減少している。生徒にとって新型コロナウイルスの感染は重大性の高い問題であることがうかがえる。

それでは、実際に生徒は新型コロナウイルス感染症の予防行動をどの程度とっていたのだろうか。外出時のマ

スクの着用、手洗いの実施、手指用アルコール消毒の実施について実態を調べた。なお、生徒には臨時休校が始まる前に感染予防に関する指導は行っておらず、今回の予防行動の実践は生徒の自主性によるものである。

（４）外出時のマスクの着用

外出時のマスクの着用を「いつもするようにしている」と回答した生徒は、第１回調査時ですでに65.4%と半数以上に上ったが、第２回調査時では81.5%まで増加した。マスクの着用を「しなかった」と回答した生徒は第２回調査時にはわずかに2.1%しかいなかった。ほとんどの生徒が外出時に意識的に予防としてのマスクを着用していたことがわかった。

（５）外出先や帰宅直後のアルコール消毒

外出先や帰宅直後のアルコールによる手指消毒について、第１回調査時には「しなかった」と回答した生徒は30.7%いたが、第２回調査時には18.5%に減少している。「こまめにするようにしていた」という生徒は第２回調査時で48.1%になり、半数近い生徒が手指のアルコール消毒まで行うようにしていたことがわかった。マスクの着用と比較すると実践している生徒は少ないが、これまで学校でもほとんどアルコールによる手指消毒をやったことがなかったことを考えると、半数近い生徒がアルコール消毒を実践しているのは興味深い結果である。

（６）外出先や帰宅後の手洗い

外出先や帰宅直後の手洗いについて、「こまめにしている」と回答した生徒は第１回、第２回調査時でどちらも80%を超え、第２回調査時には84.7%に上った。また、手洗いを「しなかった」と回答した生徒は、第２回調査時には１人もいなかった。

新型コロナウイルス流行以前の学校での様子を振り返ると、インフルエンザ流行時には必ず手洗いの励行を呼び掛けていた。しかし、「面倒くさい」といった理由などで手洗いをしなかったり、つい忘れてしまう生徒が目立っていたように感じる。今回の調査結果は、以前の生徒たちからは考えられないほど手洗いに積極的に取り組んでいる様子が見て取れる。臨時休校前に学校では手洗い等の保健指導を行っていないことから、休校期間中にメディア等から新型コロナウイルスの感染予防策として手洗いが有効であることを学び、意欲的に実践しているものと考えられる。また、家庭で保護者が積極的に手洗いに組み込んでいる可能性も考えられる。こまめな手洗いについて、実践できている生徒が多い背景に何があるのか、健康行動理論を活用してさらに検討する。

先述した「健康信念モデル」において、人が行動変容する上で必要な条件のもう一つは、行動をとることのプラス面（有益性）が、マイナス面（障害）よりも大きいと感じることである。それでは、感染予防行動につ

いて生徒はどの程度有益性を認識しているのだろうか。

生徒に新型コロナウイルス感染症の予防方法として、最も効果が高いと思う方法を調べたところ、「こまめな手洗い」が最多となった。その感染予防効果について、「高い効果があると思う」と回答した生徒は第１回調査時で57.0%、第２回調査時で66.1%に上った。生徒は、新型コロナウイルス感染予防の方法のうち、高い効果があると期待して「こまめな手洗い」を捉えており、その有益性を高く評価していることがわかった。

また、「こまめな手洗い」を今後どれくらい実践できるかその自信（自己効力感）を尋ねたところ、「しっかりとできると思う」と回答した生徒は、第１回調査時で55.3%、第２回調査時で68.3%まで増加しており、こまめな手洗いについて自己効力感が高い生徒が多く、実践することに自信を持っている様子が見られた。

マスクの着用や手洗い等の予防行動以外に「外出しない」と回答した生徒も第２回調査時には増加している。生徒の外出頻度は緊急事態宣言前後で変化し、第２回調査時の５月には「外出しなかった」と回答した生徒は22.2%に上る。第１回調査時に「外出しなかった」と回答した生徒が5.0%だったことをふまえると、感染を防止するため意識的に外出を控えた様子がわかる。また、外出をしたとしても行き先は近所であることがほとんどであり、一緒に外出する相手も家族に限っていることが多かったことが明らかとなった。

以上の点から、調査の結果、新型コロナウイルス感染症に対し、多くの生徒が罹患性を高く認識し、感染すれば自分や家族の命に関係する重大な感染症だと認識していることが示された。また、その予防行動として「こまめな手洗い」の有益性を高く認識し、自己効力感を高く持って実践している様子が明らかとなった。

３－２ 臨時休校措置やその後の学校再開に対する思い

前例のない臨時休校措置が行われる中、生徒はこの臨時休校についてどのような思いを持っていたのだろうか。夏休みなどの長期休業と異なり、部活動などの活動もなく、学校に登校できない日々が続いた。生徒にとって臨時休校措置はどのような精神的な影響を及ぼすのか考察するため、生徒が感じていたことの実態を調べた。

（１）臨時休校措置に対する思い

生徒には３月に行った第１回調査で、新型コロナウイルス感染症により学校が休校になったことについてどう思うのか、表１のような選択肢を示して回答を求めた。

表1 臨時休校に対して思うことの選択肢

- ① 学校が休みになってうれしい
- ② 自由な時間ができて楽しい
- ③ 自分が感染しないか不安だったので、休校になって安心した
- ④ 学校がなくてつまらない
- ⑤ 授業がなくて勉強のことが不安だ
- ⑥ 授業をうけなくていいのでうれしい
- ⑦ 部活動の練習がなくなっていやだ
- ⑧ 部活動の練習がなくなってうれしい
- ⑨ 行事がなくなって悲しい
- ⑩ 友達と会えなくてさみしい
- ⑪ 学校が再開してからちゃんと登校できるか不安だ
- ⑫ その他

選択肢には「うれしい」や「楽しい」といった休校をポジティブに捉えているものと、「不安だ」や「いやだ」といった休校をネガティブに捉えているものの両方を取り入れている。

調査の結果、第1回調査（3月）時点で最も多かった回答は「友達と会えなくてさみしい」で67.0%だった。次いで「学校がなくてつまらない」が61.5%、「授業がなくて勉強のことが不安だ」が53.6%だった。「学校が休みになってうれしい（28.5%）」「授業をうけなくていいのでうれしい（15.6%）」「部活動の練習がなくなってうれしい（10.1%）」といった回答は少なく、休校を喜ぶ様子よりも学校生活が無くなって不安を感じている様子が多く見られた。

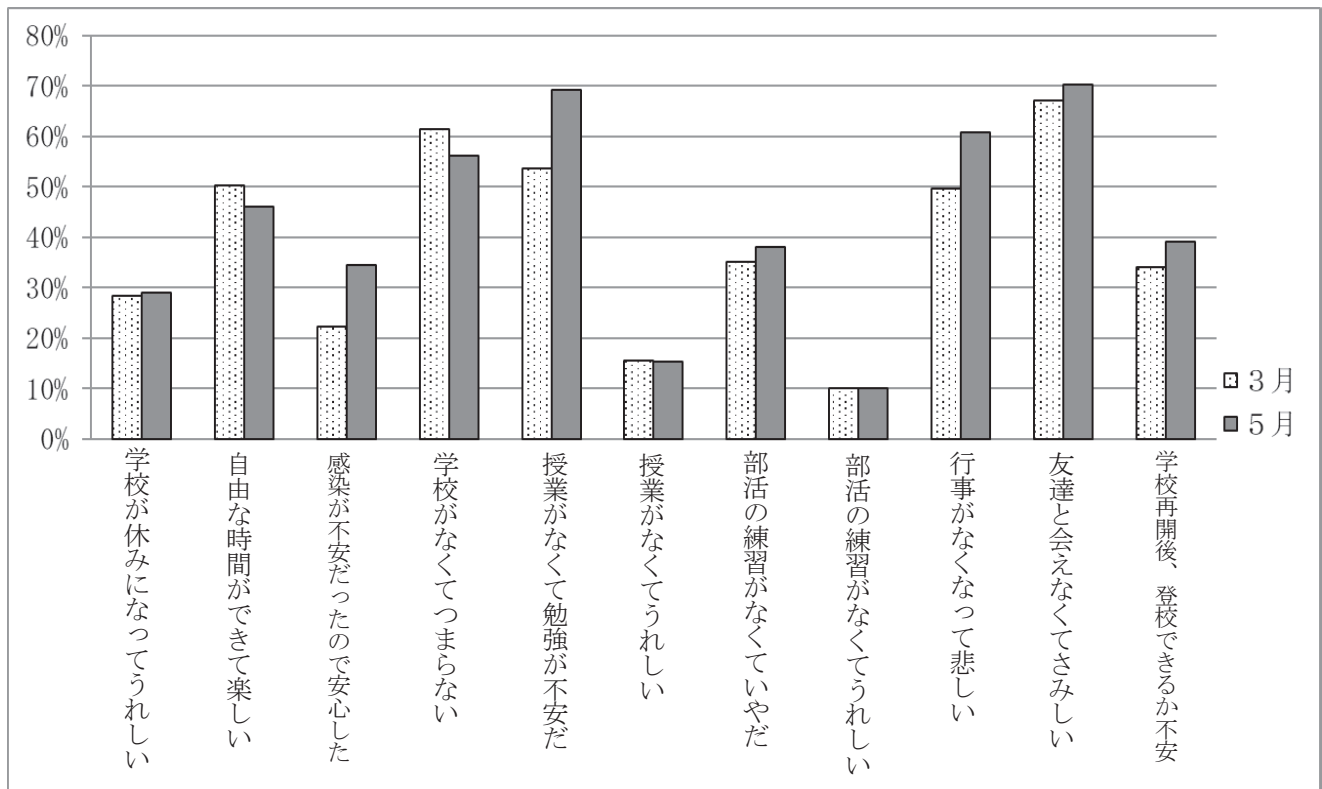
この結果は、5月の調査時点でさらに顕著になる。第2回調査では「友達と会えなくてさみしい」という回答は70.4%に増加した。先述した通り、緊急事態宣言後、生徒の外出自粛の傾向は強まり、外出する頻度が減少している。また、一緒に外出する相手も家族と出かけることが多くなっていた。学校が休校になったことで、家族以外とのコミュニケーションが極端に希薄になっている様子が見られる。

次に「授業がなくて勉強のことが不安だ」は第2回調査時には69.3%に上った。臨時休校期間中、生徒の学習はオンラインや学校から出された課題に取り組む自宅学習が中心となった。自宅での自主的な学習が中心となる中で、学習のつまづきを解決できなかったり、学習意欲が減ったりして、生徒の不安が大きくなった可能性がある。

さらに、「行事がなくなって悲しい」は3月から5月にかけて49.7%から60.8%に増加している。3月の調査時点ではまだ緊急事態宣言前であり、学校再開は春休み後とされていた。それが緊急事態宣言に伴い休校延長になったことで、春に予定されていた行事（運動会や校外学習など）の中止が決まり、生徒には少なからず喪失感があつたものと考えられる。

一方で「学校が休みになってうれしい」（28.5%→29.1%）、「自由な時間ができて楽しい」（50.3%→46.0%）のように休校をポジティブに捉えた回答は、第1回調査から第2回調査にかけて、横ばいか減少している。また、「自分が感染しないか不安だったので、休校になって安心した」と回答した生徒は、3月から5月にかけて22.3%から34.4%に増加した。国内の感染が広がる

図1 新型コロナウイルスにより学校が休校になったことについてどう思うか



中で、生徒自身の新型コロナウイルス感染症に対する危機感が高まったことがこの結果からも示されている。

以上のように、臨時休校措置が生徒にとって必ずしもポジティブなものではなく、休校が長引くほど学習の遅れに対する不安や、通常の学校生活を送れない喪失感が強くなっている傾向が示された。また、家族以外の人間とコミュニケーションをとる重要な場所であった学校が無いことで、生徒が家族以外と接する機会が著しく減少していることも精神的なストレスにつながる事が懸念される。交流が家族内に限られることは、虐待等の家庭内の問題の発見が遅れる原因にもなるだろう。戸部（2020）は調査によって小中学校の養護教諭の約9割が臨時休校によって貧困や虐待など家庭に課題のある児童生徒について心配や懸念を持っていることを指摘している。長期の臨時休校措置を行う場合、このような家庭の支援をどのように行うのか、学校だけでなく関係機関や地域とともにあらかじめ検討しておく必要があるだろう。特に虐待に関しては、地域の目が重要になる。学校は、日頃から民生児童委員などと連携を積極的に図り、心配な児童生徒がいる場合は見守りを依頼するなど、臨時休校のように学校が機能しない場合に備えた連携の在り方を考えたい。

臨時休校中に困ったことを生徒に自由記述で回答を求めたところ、つぎのような回答があった。

- ・「自由な時間が多く、何をしたらよいかわからない」
- ・「思うように外出できず、ストレスを感じる」
- ・「なにを勉強すればよいかわからない」
- ・「運動不足で体力が有り余って困る」
- ・「どこまでの外出ならいいのか、わからない」
- ・「昼寝が増えた。運動できなくてストレス」
- ・「兄弟げんかが増えた」
- ・「お昼ご飯の用意が大変」
- ・「疲れることがあまり無く、夜眠れなくなった」
- ・「パソコン学習が多く、目が疲れた」
- ・「いまの学年（旧学年）でやるはずだった勉強が少し難しくて勉強が大変」
- ・「友達からの遊びの誘いを断るのが大変だった」

これらの記述を見てもわかるように、生徒は突如として始まった臨時休校により、時間を持て余し、生活リズムが崩れたり、運動不足を感じている様子が見られる。特に第1回調査を行った3月は、まだオンラインなどの学習の準備が整っておらず、教員側も生徒に何の課題を提示することもできずにいた。生徒と直接やり取りをする機会も限られており、生徒たちは日々、何をすればよいかかわからずに戸惑いが大きかったと考えられる。家族以外との接触も限られ、孤独感を感じた生徒も少なくないだろう。臨時休校によって生じたこれらのストレスの影響を、実際に学校が再開された後よく観察し、必要なケアを実施することが重要である。

（2）学校再開に対する不安

生徒が臨時休校になったことをどのように思っているか調べる中で、「学校が再開してからちゃんと登校できるか不安だ」と回答している生徒は3月時点で34.1%だった。臨時休校が延長された5月にはこの回答は39.2%に増加している。全体の3割から4割の生徒が学校再開に不安を感じている実態をふまえ、第2回調査時には質問項目を増やし、学校再開に対して具体的などのような不安を持っているのかを調べることにした。

学校再開に対してどのような不安を抱えているのか具体的に実態を把握するため、表2のような選択肢を示して回答を求めた。

表2 学校再開に対する不安の選択肢

- | |
|-------------------------------------|
| ① 授業についていけるか不安だ |
| ② 授業が遅れてしまった分を取り戻せるのか不安だ |
| ③ 受験（進路）に影響しないか不安だ |
| ④ 50分間の授業に集中できるのか不安だ |
| ⑤ 毎朝、登校時刻に間に合うように起きられるか不安だ |
| ⑥ 毎日登校する体力があるか不安だ |
| ⑦ 体育の授業についていく体力があるか不安だ |
| ⑧ 部活動の練習についていく体力があるか不安だ |
| ⑨ 友達とうまくやっていけるか不安だ |
| ⑩ 予定されていた学校行事ができるのか不安だ |
| ⑪ 学校再開で、自分が新型コロナウイルスに感染するのではないかと不安だ |
| ⑫ 夏休みや冬休みがなくなるのではないかと不安だ |
| ⑬ その他 |

その結果、2年生と3年生で回答に異なる傾向が見られた。「授業についていけるか不安だ」「授業が遅れてしまった分を取り戻せるのか不安だ」という回答については2,3年生ともに55%を超え、高い割合を示した。しかし、「受験（進路）に影響しないか不安だ」と回答した2年生は35.6%だったのに対し、3年生は87.5%と非常に高く、ほとんどの3年生が、約3か月間の臨時休校が受験にどのように影響するのか不安に感じている様子が明らかになった。学習塾などに通っている生徒が多いが、緊急事態宣言後、それらの講義も中止やオンライン学習に代替することが多く、自宅学習が中心となった。自治体や学校毎に学習のサポート状況に差がある状況が指摘される中で、自力で行う受験勉強に不安が大きかったのではないかと推察される。

一方で2年生は、「50分間の授業に集中できるのか不安だ」（42.6%）、「毎日登校時刻に間に合うように起きられるか不安だ」（44.6%）「友達とうまくやっていけるか不安だ」（30.7%）など、臨時休校によって変化した生活習慣や学習習慣を元の状態に戻し、新しい環境に順応できるかに不安を強く感じていることがわかった。第2回調査を行った5月時点は、6月以降の分散登校による学校再開の可能性が示された時期である。生徒たちにとって約3か月ぶりの登校になる。すでに新しいク

ラスの発表は済んでいたものの、クラス替え後の同級生には一度も会ったことがない状況だった。2年生にとっては、中学校で初めてのクラス替えとなる。その分、3年生よりも新しい友達との関係づくりに不安を感じやすかったのではないかと考えられる。

また、2年生、3年生ともに「予定されていた学校行事ができるのか不安だ」、「夏休みや冬休みがなくなるのではないかと不安だ」と回答した生徒は比較的多く、行事については2年生で42.6%、3年生で48.9%が不安だと回答している。夏休みや冬休みなどの長期休業については、2年生で58.4%、3年生で48.9%の生徒が、長期休業が短縮されるのではないかと不安に感じていることがわかった。臨時休校措置によって予定通りの学校生活を送ることは難しいと理解しつつも、例年とあまりに異なる環境に戸惑っている様子が見られる。特に3年生は、中学校生活最後の1年となり、各行事についても思い入れが強い生徒が多い。彼らにとって大切な思い出となるはずだった行事の中止には少なからず喪失感を感じただろう。3月に卒業した生徒は、部活動の引退行事が中止になっただけでなく、卒業式も簡素化しての実施になった。それを見ている新3年生には、自分たちの中学校最後の1年がどのようなのか不安に感じる生徒が多いのも頷ける。

ただ、「学校再開で、自分が新型コロナウイルスに感染するのではないかと不安だ」と回答した生徒は、2年生で39.6%、3年生で45.5%にのぼった。4割程度の

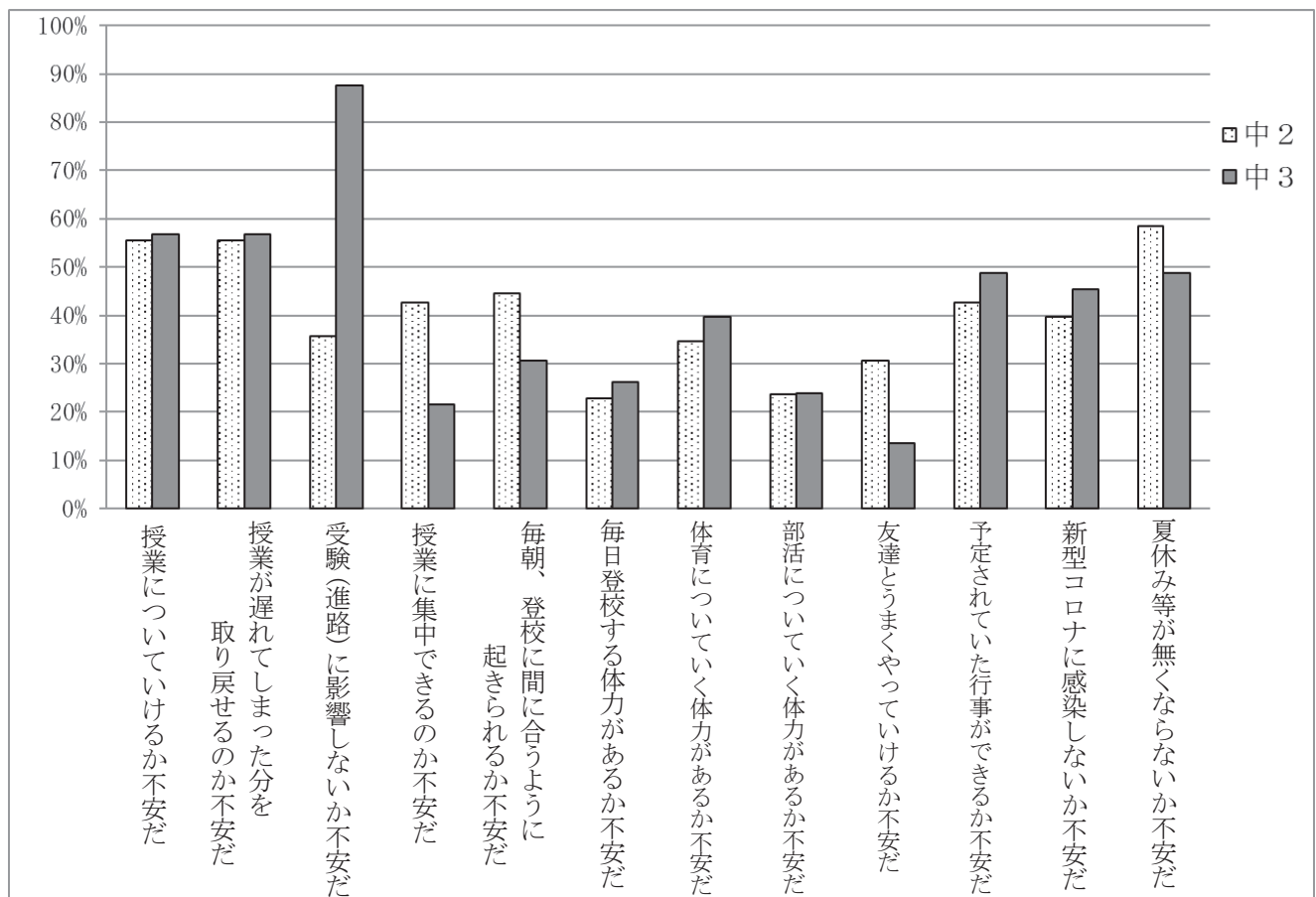
生徒が、学校という集団生活の場に感染の不安を感じており、不安を抱えたまま登校しているという前提に立って生徒に接することが重要である。集団生活の場である学校は、感染拡大が起こりやすい環境であることを十分に意識し、対策を強化して取り組む必要がある。その際、手洗い用石鹸や手指用アルコールの配備など環境面を整えることだけでなく、正しい手洗いの励行や咳エチケットなど、生徒への保健指導を充実させ、啓発していくことを合わせて実施することが求められる。

学校再開の際に大人に求めることは何か、生徒に自由記述で回答を求めたところ、つぎのような回答があった。

- ・授業についていけるようにサポートしてほしい
- ・授業が遅れているのはわかるが、丁寧に進めてほしい
- ・できるだけ今までと同じように部活や行事をやしてほしい
- ・ある程度学校行事をやしてほしい。毎日授業だけだと気が滅入る
- ・行事や楽しみだったことが無くなって落ち込んでいる人もたくさんいるから、行事がなくても楽しい学校生活を送れるように配慮してほしい
- ・夏休みや冬休みはできる限りなくさないでほしい
- ・感染予防をしっかりしてほしい
- ・友達と交流できる遊びをしたい

生徒たちは臨時休校による学習の遅れを取り戻した

図2 学校が再開するとき、どのようなことが不安か



い反面、授業の速度が上がったり、内容が省略されるなど質が落ちることに不安が大きい様子が見られる。同時に、行事など学習以外の学校生活が失われることを恐れている。学校には、感染防止策を徹底し、生徒が安心する環境を整えながら、学習や行事をできる限り保障し、学習面・心理面で丁寧にサポートしていくことが求められている。

4. まとめ

本研究は、新型コロナウイルス感染症に伴う臨時休校期間に2回のWebによる無記名自記式アンケート調査を行い、感染症やその予防行動に対して中学生がどのような意識をもっており、また臨時休校や学校再開にどのような不安を抱えているのかを明らかにすることを目的として行った。

その結果、多くの中学生が新型コロナウイルス感染症に対し、自分が感染するかもしれないという罹患性を高く認識し、さらに、感染すれば自分や家族の命に関係する重大な感染症だと認識しており、この感染症に危機感を強く感じていることが示唆された。また、その感染予防行動として「こまめな手洗い」の有益性を高く認識しており、実践に高い自己効力感を持っている様子が明らかとなった。

臨時休校やその後の学校再開に関しては、休校期間が長引くほど学習の遅れに対する不安や、行事の中止など通常の学校生活を送れない喪失感が強くなる傾向が示された。緊急事態宣言後、外出自粛の傾向が強まり、家族以外との交流が制限される中で、友達に会えない寂しさを感じた生徒が多かった。

約3か月間の休校期間を経て学校が再開する際には、3年生では顕著に受験や進路への影響を不安に思う生徒が多くなっていた。生徒は学習の遅れを取り戻したい反面、授業の速度や内容が変化することに不安を感じており、学校再開後、感染対策が十分に整った環境でできる限り通常に近い学校生活を望んでいることが示された。

今回の新型コロナウイルス感染症による全国一斉の臨時休校措置は、未だかつてない規模になった。各校の学習のサポート体制には大きな差ができ、子どもたちの心理面のケアも十分であったとは言い難い。学校という場所こそなくても、休校中であっても学校の機能をできる限り維持させる方法を考えなくてはならない。その際、今回の調査で明らかになった生徒の感染症に対する意識や、休校や学校再開に対する不安の実態は生徒へどのような支援が必要か考える上で重要なヒントになるだろう。

学校が再開されたものの、いまだ通常の学校生活とは言い難い状況が続いている。学校再開後の生徒の心身の健康状態については、改めて検討する必要がある、今後の課題とした。

【参考文献】

- 新型コロナウイルス感染症対策本部 (2020) : 新型コロナウイルス感染症対策の基本方針
<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000599698.pdf>.
 (Accessed October 20, 2020)
- 戸部秀之 (2020) : 新型コロナ感染症に伴う臨時休業における児童生徒の健康課題等に関する調査
<http://park.saitama-u.ac.jp/~htobe/health/pdf/COVID-19tobe2020323.pdf> (Accessed October 20, 2020)
- 厚生労働省 (2020) : 新型コロナウイルス感染症の予防法
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/dengue_fever_qa_00001.html#Q3-1
 (Accessed October 20, 2020)
- 松本千明 (2002) 「医療・保健スタッフのための健康行動理論の基礎 生活習慣病を中心に」 医歯薬出版